

群馬県内におけるヤマビルの生息分布の変遷

Distribution of Land leech in Gunma prefecture

坂庭浩之

要旨

群馬県内のヤマビルの分布変化について報告する。

- 1 2016年と2022年の分布を比較すると、その生息域は1.4倍に拡大していた。
- 2 分布域の拡大は、県西南部と県東部で明確であった。
- 3 ニホンジカによりヤマビルの分布が急速に拡散した。

キーワード：ヤマビル、分布変化、ニホンジカ、*Haemadipsa japonica*

I はじめに

ヤマビル (*Haemadipsa japonica*) は人を吸血することで不快な生物として認識されており、観光客や農林作業者にとって活動の制限要素となっている。群馬県におけるヤマビルの分布について、1980年代以前は群馬県四万川上流、群馬県妙義山であることが報告されている(逢沢・森嶋, 2018)。この分布地点はその後に拡大を続けていることを筆者は報告している(坂庭, 2019)。ヤマビルの分布拡大の原因として、野生動物の生息分布と密接に関係があることが指摘されている(山中ら, 2005)。森嶋はヤマビルの消化管内の未消化血液塊から吸血動物のDNAを抽出しその種類を特定しており、検査した4割のヤマビルからニホンジカ (*Cervus nippon*、以下：シカとする。)の血液が検出されていることを報告している(森嶋, 2021)。このことは、シカがヤマビルの分布の拡大に深く関与していることを支持する研究成果であった。群馬県のシカの分布は山地から中山間部、都市部近くまで広がっており、今後も拡散が続くと考えられる。

この報告は2009年、2016年と続けてきたヤマビルの分布域調査を2022年の調査結果と比較し、広がり速度を評価し、今後の広がり可能性を指摘したものである。

II 方法

調査方法は県内の鳥獣保護管理指導員、自然保護指導員を対象に回答用紙による報告を依頼した。また、一般の方にはヤマビルの発見地点を報告してもらうための「ヤマビル報告アプリ」を作成・公開し、SNSなどを利用し広報した。報告する内容は、被害情報、目撃情報、他者からの聞き取り情報とした。森林組合職員や群馬県職員からも適宜情報を入手した。また、分布情報に基づき、詳細な情報を把握するため現地での聞き取り調査を行った。

分析方法は、2次メッシュ(世界測地系)を4分割した5kmメッシュを設定し、そのメッシュ内でヤマビル分布が広く点在している場合は「広範囲分布」の生息とし、メッシュ内で偏在している場合を「狭範囲分布」の生息として判断した。

III 結果及び考察

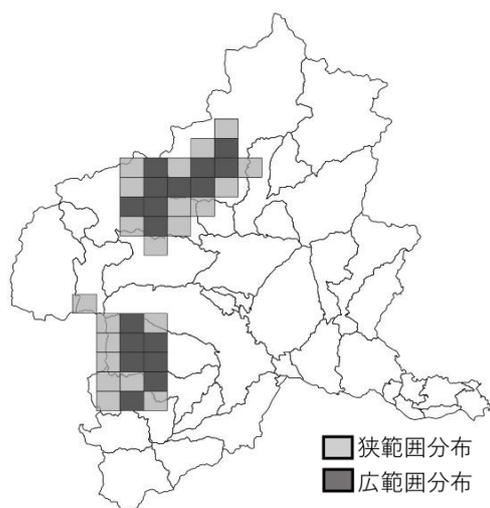


図-1 2009 年分布

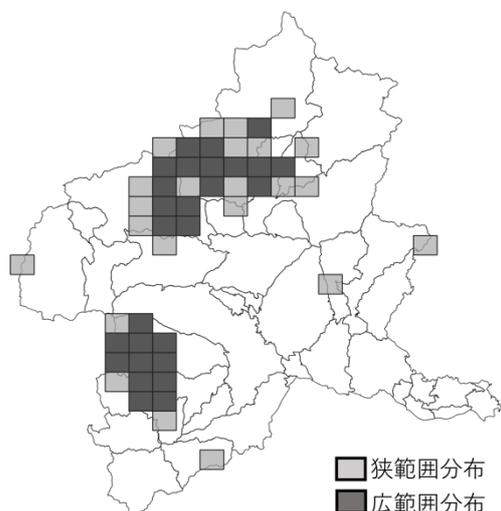


図-2 2016 年分布

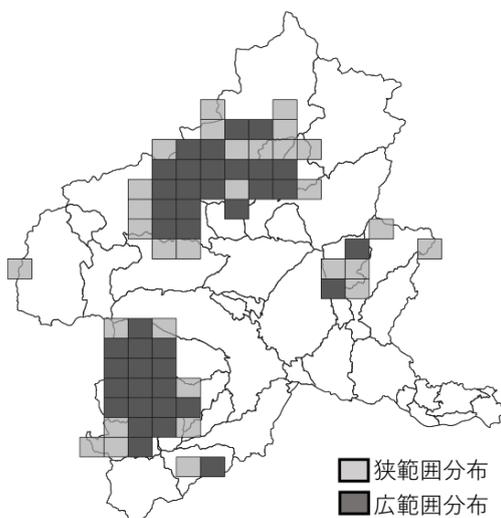


図-3 2022 年分布

鳥獣保護管理員または自然保護指導員から 34 地点、ヤマビル報告アプリから 37 地点の報告があった。また、群馬県職員から 6 地点の報告を得た。2016 年の段階では把握されていなかった新しいメッシュでの発見情報が 26 地点含まれていた。

図-1 に杉山・坂庭 (2009) の調査による結果を掲載した。図-2 に坂庭 (2019) の調査結果を記載した。

2009 年の調査結果では、広範囲分布：17 メッシュ、狭範囲分布：21 メッシュ、合計 38 メッシュであった。

2016 年の調査結果では、広範囲分布：27 メッシュ、狭範囲分布：23 メッシュ、合計 50 メッシュであった。

2022 年の調査結果では、広範囲分布：40 メッシュ、狭範囲分布：30 メッシュ、合計 70 メッシュであった。

2009 年調査 (図-1) と 2016 年調査 (図-2) を比較したところヤマビルが生息しているメッシュ数の割合は 7 年で 1.3 倍に拡大したことをすでに報告した (坂庭, 2019)。

2016 年調査 (図-2) と 2022 年調査 (図-3) を比較したところ、同様に 6 年間で 1.4 倍に拡大したことが確認された。

2022 年調査で急速に分布が広がった場所として、県西南部 (南牧村) や県東部 (桐生市黒保根地区) が確認された。南牧村では前回調査でヤマビルの分布が確認されなかったが、6 年間で村内全域に拡大していることから、現地調査でもヤマビルによる被害感が強いものであった。

2016 年調査時点でも広範囲分布のあった沼田市で詳細な現地調査を行うと、ヤマビルが林縁から公園、水田畦畔へ広がる事例もあり、広範囲分布内でもヤマビルが生活圏の近くに急速に広まり、生活や農業生産へ影響していること確認された。

2009 年と 2016 年の比較で 1.3 倍 (7 年間) に比較し、2016 年と 2022 年の比較で 1.4 倍 (6 年間) と増加傾向が継続しており、今後の分布拡大に注視する必要がある。

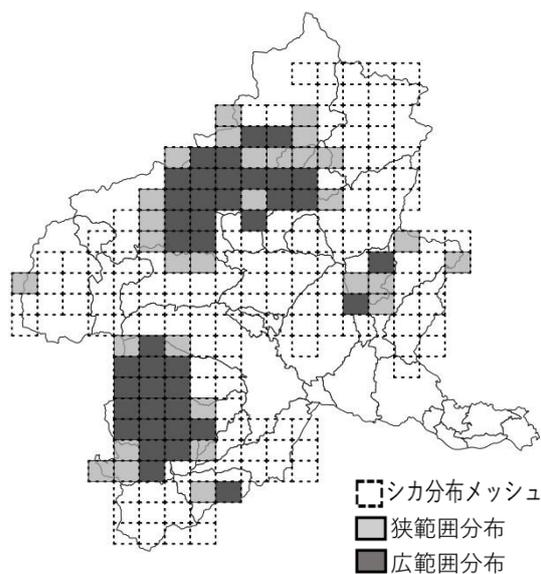


図-4 シカ分布と2022年分布

拡大した要因については、シカの存在が影響していることが森嶋の研究により明らかとなっていることから、2020年にシカの有害捕獲または狩猟捕獲があったメッシュ（日本測地系）からシカの分

布メッシュを外挿しメッシュ地図を作成（世界測地系）し、2022年のヤマビル分布メッシュと重ねた（図-4）。シカが分布しているメッシュ範囲内でヤマビルが分布していることが図上からも明らかで、ヤマビル未分布のメッシュも多いことから、今後も分布拡大が継続することが示唆された。

シカがキャリアとなり2009年から2022年の間に一貫して分布拡大が続いており、13年間で1.8倍にヤマビルの分布域は拡大している。

本報はシカにより他種の生物が拡大したひとつの事例を示す研究で、マダニやウイルスなども同様に拡散していることも推測される。

シカやイノシシの生息頭数増加による農林業被害の増加が注目されるが、捉えにくいこのような変化を正確に把握することも重要な研究と考える。

IV おわりに

ヤマビルが生息する地域で生活者を守る方法として、筆者が2019年に報告しているヤマビル対策として、Deet成分（N,N-ジエチル-m-トルアミド）を30%含む虫除けスプレーが有効であり、入手性が良い点からも使用を推奨してきた。2022年時点ではこれら虫除けスプレーを販売する医薬品メーカーのホームページでも「ヤマビル」に有効であることが追記されており、これらを適切に使用しながらヤマビル対策をすることが手軽で確実な方法である。

群馬県内のヤマビル分布を示した本研究が、現場の対策に生かされることを期待する。

引用文献

- 逢沢峰昭・森嶋佳織(2018), 1980年代以前のニホンヤマビルの分布, 日本森林学会誌, 100(2), 65-69
- 森嶋佳織(2021), DNA解析によるニホンヤマビルの宿主動物の識別と分布拡大範囲の推定, 森林科学, 92, 8-11
- 坂庭浩之(2019), ヤマビルの生息分布と薬剤感受性, 群馬県林業試験場研究報告, 23号, 6-10
- 杉山直人・坂庭浩之(2009), 群馬県内のヤマビル分布状況, 群馬県立自然史博物館研究報告(14), 145-148, 2010
- 山中征夫・山中千恵子・稲村宏子・山根明臣(2005), 森林における大型哺乳類の生息状況とヤマビルの個体数, 日本森林学会大会発表データベース, 116巻, 第116回日本森林学会大会, セッションID PB081, p. 694